

「蘇武の賦・序曲」

—昭和陸軍の動乱—



牡丹江にて（昭和20年1月）

はじめに：

私の父川島清は、日支事変以来軍医として各地を転戦し、満州で終戦を迎え、ソ連に捕えられ軍事裁判にかけられ、その後10年の長きに亘って抑留された。

その折の経験を、十年ほど前に、千葉日報紙に、「蘇武の賦」と題して104回にわたる連載記事として発表した。

のちに、父の遺品を整理中、「蘇武の賦」の序曲として書いた「破局前夜」と題する未発表の手書きの原稿を発見した。中身は、父が近衛師団の軍医部員として在勤中に遭遇した、昭和10年8月の相沢事件および昭和11年の二・二六事件を主題にしたもので、いずれも父がその現場に居合わせて見聞したことを書いたものである。

なお、「蘇武の賦・序曲」は単行本として最近発刊されました。この原稿には次の目次が付けられていましたが、本誌の紙面をお借りして、一、二の一部、三の一部、四の一部、五、六および七を発表したいと思います。

（川島 順（21）記）

- 一、 相沢事件
- 二、 再び近衛師団司令部に
- 三、 結核予防
- 四、 寓居
- 五、 二・二六事件
- 六、 事件処理
- 七、 蘆溝橋事件
- 八、 市ヶ谷台
- 九、 李王垠殿下随想

1. 相沢事件

私は、三宅坂にある陸軍省医務局衛生課の部員室に立っていた。京城龍山の第二十師団軍医部から、東京の近衛師団軍医部に転勤の挨拶にやって来たのであった。部員室には誰もいない。おかしいこともあるものだとあたりを見渡していると、慌しい気配とともに一団の将校が、ぐったりした一名の将校を運びこんで机の上に横臥させた。見ると右上膊を負傷している。既に繃帯されていたが重症と見えて夥しい出血の痕があって、呻くように何か言っている。運んで来た将校のうち一人が、私に、意識があるかどうか診てくれと頼んだ。負傷した将校は、東京憲兵隊長の新見大佐であった。大急ぎですぐ近くの東京第一陸軍病院に送致する手配をした。何時の間にか、医務課の入口近くの椅子に、マントを着たままの将校が、肩を怒らせ厳めしい顔をして片手に軍刀を握って傲然と巨体を托していた。繃帯をしている左手が印象的であったが、憲兵が入って来てその将校に何か囁いた。彼は無言で立ちあがって、憲兵と一緒に室から立ち去った。この将校こそ、陸軍省軍務局長室で軍務局長永田鉄山少将を斬殺した直後の相沢中佐であった。憲兵隊長は、軍務局長室に居合わせて相沢中佐の軍刀によって負傷したものであった。

昭和十年八月十二日のことである。これが私が東京着任早々遭遇した大事件であった。

師団司令部内の空気は、私が京城龍山で味わったような呑気なものではなかった。着任後間もなく懇意になった経理部主計将校の話の聞いただけでも大変なところに来たものと思った。表に現われなかった軍部のいろいろの動きも聞かされた。

陸軍内部には、皇道派と統制派といわれる派閥争いが激しく、統制派はかつて櫻会に属して、三月事件などを計画した参謀本部や陸軍省の中堅幹部たちで、十月事件の失敗後戦争政策を進めてゆけば、クーデターの如き非合法手段によらなくても、軍部の発言権を強化できると考え、官僚や財閥とも結んで戦争体制の強化を図っていた。その中心は永田軍務局長であった。



京城龍山の第2の参謀本部



首相の最晩年の櫻井権の邸で
昭和10年
洋子 眞崎 眞 〇 眞
子 子

皇道派は、荒木、眞崎の両大将を中心とする一派で、盛んに天皇中心主義を強調するため、十月事件後もクーデター計画をすてず、青年将校たちを煽動利用しようとしていた。昭和十年七月、眞崎教育總監の罷免に怒り、相沢中佐の暴挙となった訳である。

当時の国際情勢は、実に混沌たるものであった。米大統領ルーズベルトの大理想の下に築きあげられた国際連盟も瓦解に向って一歩一歩進

み、世界的大動乱が何時勃発するかも知れぬ要因が徐々に醸成されつつあった。

イタリーのムッソリーニ独裁政権の誕生に次いで、昭和八年（一九三三）一月三十日、ドイツにファシズム内閣成立、ヒットラーが首相となり、十月国際連盟脱退、独裁体制に進み、ベルサイユ条約をやぶり再軍備を開始した。

日本は、国際連盟から派遣されたリットン卿を団長とする満蒙調査団の調査の結果、満州における日本の行動は侵略であるとの断定に憤激して、同年三月国際連盟を脱退した。アメリカ合衆国では、経済大恐慌による空前の窮乏と混乱を救うため、新民主党のルーズベルト(第二代)は、ニューデール政策を唱道し、産業の国家統制強化、物価の引き上げ、生産の拡大、景気の回復、民衆購買力の向上、国内市場の豊富化を提唱し、一方労働階級支持獲得のため進歩的労働立法、社会保障政策を採用した。ソ連は、世界各国の経済大恐慌の圏外にあって、社会主義体制の下において着実に経済建設を進め、昭和七年（一九三二）第一次五か年計画を完成、大規模な工業化と農業の集団化を図って、アメリカに次ぐ世界第二の工業国に躍進し、十万の集団農業（コルホーズ）をもつ機械化農業を発展させた。このことは各国内における革命運動の恐怖と結びつき自由主義諸国の反ソ政策を強化させた。一方イギリスは、日本やドイツの安価な商品の輸出によって、世界市場の攪乱をおそれ、カナダのオッタワに昭和七年（一九三二年）大英帝国諸国代表を集めてオッタワ協定を結び、大英帝国諸領土の経済的つながりを強め、外国からの輸入防止をきめた。他の列強も、植民地や従属国をあわせたブロックをつくり、高率な関税保護政策をとったことは、植民地を持たない日本やドイツの世界再分割の要求を強め、資本主義列強の対立を激化させ、各国とも経済を軍事的体制に組みなおし、戦争準備の歩調を早めた。

日本においては、犬養内閣の金輸出再禁止、積極財政、インフレ政策の結果、昭和七年後半から、世界にさきがけて恐慌を抜け出し、景気を回復した。然し農村の恐慌は、依然としておさまらず、労働争議の減少に反して、小作争議は増え、深刻な農業恐慌の様相を呈するに至った。

このことは、戦争政策続行にも大なる障害をなすため、五・一五事件（犬養首相殺害）後、齊

藤内閣は農村救済を重要政策となし、農村の自力更生運動を推進し、昭和八年から産業組合拡充五か年計画を進めた。一方、財閥は経営表面からの退陣、持ち株の一部公開、社会事業や医療施設への献金など世論の非難を和らげ、更に軍需工業部門の大拡張、重化学工業中心の財閥の再編成に乗り出した。満州事変後、国内は一旦軍需景気が訪れ貿易も一時拡大した。しかしそれも長くつづかず、昭和十年頃から深刻な経済的危機が訪れてきた。刻々に増加する軍需費支出のための財政赤字の増加、これを補うための公債の増発、これによって悪性インフレの進行と、軍の需要、原料資材輸入の増加に対して、各国の関税引き上げによる輸出不振は、貿易の赤字の増加を招き、このため国内経済は資金不足、資材の欠乏に悩みはじめていた。日本の満州への投資は、軍用鉄道や軍需工業に集中し、日本の支配は、現地の生産を高めて住民の生活水準を向上することへの配慮に欠けるところがあったので、窮乏した人民の反日武装闘争が絶えなかった。

昭和十年(一九三五)五月、華北の日本駐屯軍は、国民政府に対し、河北省主席の交代、同地方から国民政府軍隊と国民党機関の撤退、反日運動の禁止を求め、又チャハル省についても同様の要求を出し、何れも承認せしめた。同年十一月、日本軍は、塘沽協定によって河北省東部非武装地帯に冀東防共自治委員会を設置し、同年十二月には、河北・チャハル両省にまたがる宗哲元を委員長とする冀察政治委員会をつくらせ、同地区を国民政府から半独立状態におかせた。日本の勢力が華北迄及んだことは、中国人の抗日民族運動を急速に高めていった。当時における日本内外の情勢は、かくの如くであった。この時、既に世界的動乱の兆しが現れつれ始めていたのである。

2. 二度の勤め(再び近衛師団司令部に)

近衛師団司令部は、近衛歩兵第一旅団、近衛歩兵第一連隊、第二連隊と共に今の北の丸公園内にあった。昭和十年八月当時の師団長は朝香宮鳩彦中将で、軍医部長は陸軍軍医学校教官から八月の異動で着任早々の三木良英軍医少将であった。部員は私のほか次級部員の富田四郎軍医大尉で、書記として数名の衛生部下士官がいた。軍医部は本館二階の東側にあつて私が十数年前勤務していた時と同じところであった。

振り返って、そのころ(大正十二年)、私は東京第一陸軍病院から中野電信連隊に転勤して、病院時代経験した再生不良性貧血の病理学的研究のため陸軍軍医学校の病理学教室において柏木教官の下で研究に没頭していた。柏木教官は私が任官当時近衛歩兵二連隊に勤務していた時の前任軍医であった。連隊の平井正就軍医少佐から近衛師団軍医部部員に転任の内命を受けた私は、このまま研究を続けたいし又部員などという職務は私には不適當であるから御断りしてくれるようお願いした。然し既に決定のあとで今変更することは出来ぬとのことであつた。不満ながら着任した軍医部員の椅子の座り心地は良くはなかつた。時の軍医部長は合田平軍医監で、高級部員の金子鱗三等軍医は後の俳誌「かまつか」主宰の金子麒麟草その人であつた。この方との出会いが私を俳句への道へと導いてくれた最初の切っ掛けであつた。



陸軍軍医学校防液学教室(大正15年頃)

人間の一生というもの不思議なものだ。当時私には不適當だと思っていた職務が私の軍在職中終始つき纏つて最後は満州の第一方面軍軍医部長という職務のまま終戦を迎える運命になつたのであつた

さて、私が二度目に近衛師団に着任した当時の陸軍省医務局長は小泉親彦軍医中将であつた。小泉軍医中将は衛生部将校としては逸材であつた。長く陸軍軍医学校衛生学教官として衛生学教育を主宰して多くの英才を教育したばかりでなく、第一次世界戦争の経験に基き早々化学兵器の重要性を認識し、その医学的研究を進めていた。陸軍省医務局長となるや国民健康が軍戦力上から見ても、最も重要な鑑み、時の陸軍省軍務局長後宮淳中将と提携して、厚生省の新設を実現せしめたことは、後日ソ連抑留中、

後宮大将から親しく聞くことが出来た。小泉軍医中將は東條英機内閣の厚生大臣として大東亜戦争終結時敗戦の責任をとって自決されたことは、周知の如くである。

小泉医務局長は同時に軍衛生については兵員の保育即ち栄養と休養の調和を強調した。それと共に当時最も一般国民、殊に軍隊において猛威を振っていた結核予防に重点をおき、その予防撲滅のために大綱を示して全軍に布告せしめた。而して近衛師団はそのモデルケースと指定された。このことは三木軍医部長が、多年陸軍軍医学校において、内科学の教鞭を執り結核の権威であったことにもよると推察される。

3. 結核予防

4. 寓居

西荻窪は私が近衛に着任してからの住居の所在地であった。神明町といって中央線の西荻窪駅で下車して徒歩で十五分か廿分の距離の所にあった。この頃このあたりは新興住宅地として開発されたばかりで、道路も砂利道で舗装されず、雨天の日には、長靴が必要な位であった。ずっと後に仮舗装が施されたときは、喜んだものだ。もともと畑であったと見えて新築住宅がそこそこに建てられ、あとは空地になっていて、その間に野菜畑が点在していた。大きな農家の藁葺屋根や杉の林があちこちに残っていた。



西荻窪の留守宅川島一家(昭和16年頃)

西荻窪の神明町の私の住居から東の方荻窪寄りのところに四男眞の友達の軍人家族が住んでいた。時々子供達と散歩に来られた御家族にお目にかかったことがある。この眞の友達に光森君と言って陸軍将校の父を持っていた。その人こそ私が北京在勤中、李王垠殿下が北京派遣軍

司令部附となられた際にお付武官として北京に来られ光森勇雄中佐である。



陸軍予科士官学校光森勇雄中隊長



西荻窪の光森中隊長一家

光森中佐には、その後、三男順が陸軍予科士官学校に入った際の中隊長(予科第21中隊中隊長)としてお世話になった。同中佐は終戦後中央大学に学び、図書出版に従事し、会社社長として活躍されたと聞くが、惜しむらくは、多くの春秋を残して昭和三十九年五月忽然として他界せられた。

後にその追悼集を倅の順に見せて貰った。その本のタイトルは「土手のすかんぼ」で、父君の大好きでよく歌っておられた「土手のすかんぼ ジャワ更紗 昼はほたるがねんねする」の歌詞からご家族一同の提議によって採用されたということである。これから見ても父君を中心にした模範的な家族であつたらしく、ご家族団欒のさまが思い浮ぶ。

5. 二・二六事件

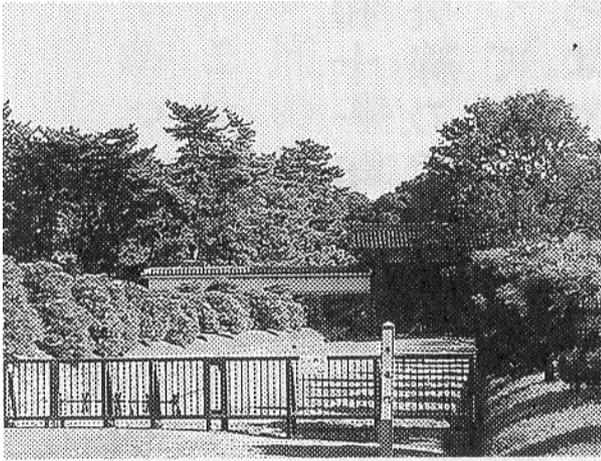
昭和十一年(一九三六)二月二十六日、この朝も何時ものように出勤のため西荻窪から中央線の電車に乗り、四谷駅で下りた。しばらく待っても市電が来ないので半蔵門の方へ向って歩き出すと私と反対方向から陸軍の将校があとからあとからとぞろぞろやって来る。ちよっと不審に思ったがそのまま裏通りに曲って英国大使館の横から皇居と近衛宮門の間にある竹橋へ通ずる道路に出た。数日來の雪はまだ皇居お濠にも道路にも一面に真白く残っていた。お濠を越して入口にかかるとバリケードが施され近衛兵が剣附銃を小脇に抱えて立哨している。何ごとかと思つて訳ねると麻布の兵隊が発砲したということである。真相はわからないがこれは容易ならぬ事態が起こつたに違いないと悪い予感を懐きながら、近衛師団司令部へと急ぎ歩を進めた。司令部は上を下への大騒ぎであった。今早暁、北一輝の唱道する日本改造法案に共鳴した在京皇道派の将校二十二名は歩兵第一連隊、歩兵第三連隊、近衛歩兵第三連隊の下士官兵を加えて一千四百余名を率いて決起し、数隊に分れて首相官邸の齊藤実内大臣、高橋是清蔵相、渡辺錠太郎教育総監、鈴木貫太郎侍従長のほか警視庁、朝日新聞社を襲撃した。これがため齊藤内大臣、高橋蔵相、渡辺教育総監は即死、鈴木侍従長は重傷を負い、首相岡田啓介海軍大將は難を免れた。又遠く熱海に転地中の牧野伸顕内大臣を襲つた一隊は、失敗に終つた。

襲撃の終つた反乱軍は首相官邸や陸軍省を含む永田町一帯を占拠し、「尊皇討奸」の旗標を掲げて、要求の貫徹を謀つた。彼等が要求としてあげたのは、真崎大將を首班とする維新内閣の組閣によって、軍部独裁政権の樹立である。これらのことは後になって次第に明らかになったことであつて、当時はすべて混沌たる状態で如何なる事態が発生したか予想することも出来なかつた。近衛師団として禁闕守衛の任務に鑑み、最悪の場合は、独力をもつてしても、あらゆる外部の圧迫を排して、皇居を死守しなければならないと腹を据えた。この時私は、ひそかに心の奥で死ということを考え、覚悟したのであつた。この日から私も司令部職員は全部司令部庁舎に泊りこむことになった。決起軍に対する軍首脳部の考えは当初かなり動揺していたらしくいろいろの情報や噂が乱れ飛んだ。司令部の幹部のなかにも反乱軍と電話で交話する者もあつた。時の陸軍大臣川島義之大將の優柔不斷の

態度に対する非難も聞かれた。これは後に聞いたことではあるが、外国の通信員等の目には、右翼と思われる人、左翼と見られる人が同時に宮中に入出入りするを見て不可解のことに思い、なかには共産革命が起つたと考えたものもあつたということだ。翌廿七日になって漸く帝都に戒嚴令が施行され、近衛師団、第一師団の外、宇都宮から第十四師団が出動した。反乱軍を鎮圧することに決したのは、決起三日後のことであつた。二月二十八日、反乱軍討伐の奉勅命令が下り近衛歩兵第二連隊長の率いる一箇連隊が夜陰に乗じて、反乱軍鎮圧のためその立て籠っている陸軍省構内に突入することになった。近衛歩兵第二連隊は、第一連隊と並んで司令部の東隣、今の北の丸公園の中にあり、私が任官最初に勤務した部隊である。私は衛生勤務者指導のため連隊に行った。完全武装の将兵は宮庭に整列している。凜冽たるものであつた。闇夜である。重い沈黙のうちに殺気がこもり時折相触る銃剣のかすかな響きが、深い静寂を破る。あと何刻も立たないうちに鮮血が迸り、阿鼻叫喚の地獄絵巻を展開するかも知れぬと思うと、思わず身うちが緊張し、胴震いを覚える。後にも先にも私は、この時ほど緊張し、厳肅なる気分になつたことはなかつた。幸いにして流血の惨事を見ることもなく、反乱軍は降伏し、翌二十九日反乱は収まつた。その後、私達司令部の職員は、偕行社に移つて約一ヶ月間、あの朝出勤したまま家族とは相見ることが出来ず、従つてその消息を知る間もなかつた。家に帰ることが出来るようになって家人から聞いた話によるとその朝荻窪方面に夥しい銃声を聞いた。これが渡辺教育総監襲撃の際の機銃掃射であつたことを後で知つた由である。



近衛師団司令部（戦争中は大本營）



二・二六事件で反乱軍と
正規軍が対峙した半蔵門



皇居に馬首を向ける小松宮殿下の銅像

淡雪の歩哨銃剣厳然と 濠端の斑雪機銃相對す。
反乱軍は、三宅坂の下に、近衛兵は、これに対し
して半蔵門外の道路上に機銃を据えて相對峙し
ていた。

春寒や夜の銃剣触れて鳴る
肅として精兵一千牙え返へる
残雪や死斗の刻一刻と

戒嚴令が施かれ戒嚴司令部が出来た時、戒嚴
司令部官香椎浩平中將の兵に告ぐの布告がラジ
オで流された。「まだ遅くない」という名文句は
有名であった。

戒嚴中の出来事として忘れ難いことは、近衛
からお濠をへだててすぐ近くにある図書出版会
社の地階で仮眠中の第十四師團の兵数名が一酸
化炭素の中毒に罹ったことである。会社の小使
の親切な心遣いで置かれた火鉢の炭火が仇とな
ってこの惨事を巻き起こしたのであった。急報
に接して私が駆けつけたときには、何れも重症
で意識を失っていた。早速応急処置の上陸軍病
院から救護班の急派を得て酸素吸入、人工呼吸
其他の救急措置を講じたが、終にこれら犠牲者
を救うことの出来なかつたことは甚だ遺憾であ
った。

6. 事件処理

二・二六事件のため陸軍では陸軍大臣はじめ
軍事參議官等首脳は殆ど全部引責辭職した。近
衛師團においても、近衛歩兵第三連隊の一部の
將兵が、これに参加した廉によって、朝香宮中
將の後任師團長橋本虎之助中將が在職日浅き
にかかわらず辭任した。橋本中將は、堂々たる風
貌を備えた知勇兼備の將軍であつた。滿州国建
國の後滿州在野の協和會會長の要職にあつて活
躍していた。不幸にして終戦後ソ連に抑留され、
あわれ異國の土となられた。その頃(昭和二十
七年十二月) 偶々私は戦犯として山田乙三大將
とソ連の同じラゲリにいたので大將壽山翁の
哀悼歌を拝唱することが出来た。

老将橋本の死をききて

さすらひて病の床に逝きしといふ友の

奥津城訪ふすべもなし

いくとせを契りし友はことくにの遠き

黄泉路をひとり行かむ

手をとりにて語りつくすと誓ひてし

其の日はついに来ずて過ぎけり

反乱軍に参加した下士官兵は皆原隊に復歸し
て、上官の命によって行動したものとして何の
罪を受けることはなかつた。然し將校らは彼等
の豫期に反して、代々木陸軍刑務所に収容され、
裁判は特設軍法會議裁判で行われ七月五日判決、
北一輝、西田税とともに安藤、村中、磯部ら首
謀者十七人に死刑が宣告され、一週間後銃殺刑
に処せられた。軍法會議には、近衛司令部から
も法務官が加つたので、その模様を風聞する
ことが出来た。

彼等は北一輝の思想に影響されるところが多く、昼夜接触する兵士等の家族、殊に東北地方において甚だしき貧窮のため人身売買の悪習、娘らを身売りする家庭の多きを知り、これは一に政治貧困、財閥の横暴によるものとなし、この際、一挙に政治を革新して、天皇親政の治世におくべきであると確信して、この拳に出でたものである。歩三の安藤大尉の如きは、蓋し、慎重にしてこの謀議に加わりながらもその計画の未だ熟せざるに思いを致し、即時実行することを躊躇していたが、部下の下士官の姉は娼婦に、妹は銀座のカフェに勤めていることを知り、その下士官を自室に呼び実状を糺したところ、想像以上の窮乏の甚だしきを知り、その部下の声涙くだる決起懇請に、即座に決意し決起に参加するに至ったとのことである。彼等の墓は代々木にあり烈士の墓として今なお香華が絶えないという。

橋本中將の後任として親補された近衛師団長は香月中將であった。中將は、長身、端正、智謀の將という観があった。着任されるや司令部将校一同を会議室に集め、開口一番発せられた言葉は、「フランスにおいては、幕僚というものは、司令官の異動と共にそれに付随して異動することになっている。わが国においてはそのような習慣はない。然し各位は、そのようなことには捉われず、虚心坦懐協力一致して私を補佐して貰いたい」ということであった。私の如き軍医部の一部員にとっても、この言葉により師団長を身近に感じ深く感銘したものであった。

香月師団長は、特に兵の健康管理に深い関心を持ち、演習、訓練は最大限に行わなければならないが、そのためには、あらゆる科学的手段を講じて、兵の健康維持、増進を図り、演習、訓練のための悪感作はすべて排除しなければならぬという持論を堅持していた。

この年の秋季師団演習は富士の裾野で行われた。師団長の構想の下に最も激烈なる演習計画が立案された。師団長の意図に基き衛生、経理など総力をあげて兵員の健康維持の方策を講じた。師団司令部も夜を徹して笹坂峠を越し、山中湖を右側眼下に眺めながら行進した。夜の更けるにつれて高原の寒気は、戒衣を通して、肌を徹した。徒步行進の兵士らは反って汗を流しているかも知れないが、こんな場合乗馬の並步行進は、苦痛である。襲って来る寒気に堪えながら旧鎌倉街道を通り、富士吉田をへて川口湖

畔に辿りついた。旅館で小休止の後再び富士北側の山麓を一周して、西湖、精進湖、本栖湖をへて、富士西側山麓を迂迴して、大宮口の裾野で旅団対抗演習の最後の幕が切って下された。払暁両軍の壮絶なる遭遇戦で演習は終了した。今回の演習を通じ富士の山麓を殆んど一周して、澄みきった秋空に聳ゆる霊峰富士の秀麗な万態の姿を、飽くまで眺めることが出来た。如何にも日本の象徴たるにふさわしい名山だと思った。この演習において、師団長の企図した訓練は、十分に達成せられ一名の犠牲者も出さなかったことは満足すべきことであった。この演習に参加した軍医部長は三木軍医少將の後任山本順市軍医少將であった。三木軍医少將は支那派遣軍の増強に従って北支天津に転出したのである。山本軍医部長は陸軍軍医学校衛生学教室で衛生学を専攻し、私が軍医学校の学生時代小泉教官(後に医務局長)の下で試験管を握っていた姿が思い出される。香月師団長とは前任地からの知り合いであった関係もあって軍医部長の積極的な意見がよく採用された。(次号は盧溝橋事件)

《日中戦争へと拡大》

7. 盧溝橋事件

昭和十二年一月第七十議会の休会明けを前にして、政友民政両党の大会は軍部とその戦争政策に対する国民の不満を背景として、政府や軍部への批判的態度を表わし、休会明けの国会の冒頭、政友会の濱田國松代議士は、軍部の政治関与を激しく非難する演説を行い、寺内壽一陸相との間に「腹を切れ」という激しい論争となって廣田内閣は倒れた。元老西園寺は、つぎの首相に元陸相宇垣一成を推薦したが軍部の反対にあい流産した。

宇垣大将組閣工作における軍部の動きは、司令部内で参謀たちの口からいろいろと耳に入ることが多かった。殊に香月師団長が、陸相就任を断わって司令部に帰ったときの様子が目に浮ぶ。この頃陸軍大臣は、現役軍人に限られていたので、軍部の反対に遭っては、組閣も出来ないのであった。これより先同中將は侍従武官長にとの話もあったように聞いている。

宇垣内閣流産の後をついで、同じく元陸相林銑十郎内閣成立、予算成立後議会解散、総選挙の結果与党惨敗、政友、民政とも依然議会の多数を制した。そのため林内閣は倒れ、六月近衛文麿内閣が成立した。

日本の勢力が満州から華北へと広がり、中国の抗日運動に油を注ぐ結果となったことは、既に述べた通りであるが、ここで更に日中にとって至って不幸な事態が起こった。

牽牛織女/牛郎織女

この年の七月七日七夕祭の日である。この夜一年に一度逢うという牽牛織女、中国流に言う牛郎織女の二星を祭る日である。北京の西わきを北から南に流れる永定河にかかった橋が盧溝橋である。マルコポーロの旅行記にも記されている有名な橋である。この付近で日本の支那駐屯軍のある中隊が演習中、西方の中国軍のいる方角から実弾の飛来する発射音がきっかけとなって、連隊長牟田口廉也大佐は、中国軍の敵対行為と見なし、中国軍兵営を攻撃し、これを占領した。中国の抗議にも拘わらず二千から六千に増強されたばかりの支那駐屯軍はたちまち付近一帯を占領した。

七月十一日、華北の実権を握る中国の第二十九軍長宋哲元は、日本軍の要求をことごとくいれて、停戦協定に調印した。この日、日本政府は、華北に内地から二個師団を急派する決定を下すとともに、重大な決意を表明した。近衛師団長香月中将が支那派遣軍司令官に任命された。華北におけるかくの如き困難なる時局を切り抜けるには最も適任な名将だと、私は心ひそかに思った。後任の近衛師団長は西尾中将であった。

七月二十七日、本国および満州からの増援軍の華北に到着するや宋哲元に対し、北京及び天津の明け渡しを要求し、翌日から総攻撃をかけて、二日間で京津地区を占領し、近衛内閣の不拡大方針なるものは次々と破綻して、いわゆる支那事変としての全面的な戦争へと発展したのである。これが八年間にわたる日中戦争のはじまりとなった。

かかる年の八月一日、私は陸軍予科士官学校衛生学部長をかねて教育総監部附を命じられた。今までの長い軍隊生活のうち私の勤務は、朝鮮軍を除けば内地ばかりで、外国の土を踏んだ経験は全くなかった。支那事変勃発を機にひそかに望んでいた外地勤務の望みは全く断たれることになった。八月十三日、上海方面に居た海軍も華北の陸軍と呼応するように陸戦隊と第二艦隊は、ついに火蓋を切り、十五日には九州の基地から飛び立った海軍航空隊が中国の首都南京に猛爆撃をあげさせた。



盧溝橋



盧溝橋の袂に建てられた看板

(説明) 中国の反日歴史問題の教育はますますエスカレートし、いたるところに記念館、記念碑を新しく設置し、反日スローガンやそれに関する写真、パネルの展示を行っている。

これを裏付けるように芦溝橋の入り口左側に上記の写真の立て看板があった。この内容は橋の歴史が書かれているが、最後の3行(英語)に「この橋は歴史的遺跡であるだけでなく英雄的な橋である。1937年7月7日にここで事件が起こった。」と極めて抽象的に書かれている。この看板は「中国人民抗日戦争記念館」のあからさまな反日的論調とは対比的である。恐らく江沢民が実権を握る前に作られたものであろう。

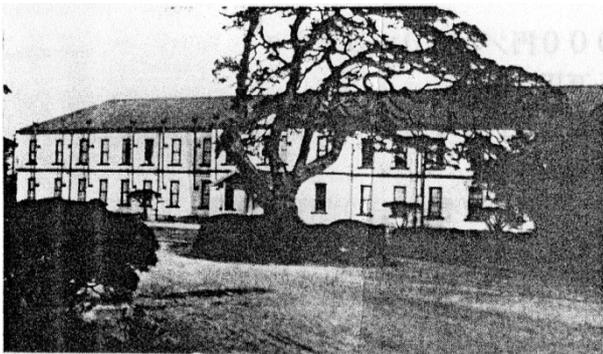
陸軍省軍務局長後宮淳中将が「海軍の大馬鹿者めが余計なおせっかい出しやがって。日本は揚子江あたりまで手を伸ばすわけにはいかん。ソ連に向かうのが先だ」と激怒したのは、このときであった。

この日、近衛首相は支那の暴挙を膺懲し、南

京政府の反省をうながすためと称して、ただちに陸軍の大部隊を上海にも送ると同時に、この戦争の名称を支那事変と改めた。

8. 市ヶ谷台

陸軍予科士官学校は、将校生徒大增員に伴って市ヶ谷台の陸軍士官学校内に今回新設せられたもので、私の任命もこのためのものである。陸軍士官学校とは、神奈川県原町田の相武台に工築中の新校舎の完成するまで同居することになった。



市ヶ谷台上の陸軍予科士官学校生徒舎

校長は甘粕中将で、関東大震災のさい社会主義者大杉栄らを殺害したことで有名な甘粕大尉の叔父にあたるということだ。教育部長の李王根少将と生徒隊長とは何れも近衛歩兵第二連隊以来の旧知であった。予科の将校生徒のなかには、東久邇宮稔彦王の第二王子もおられた。王子宮は一般生徒とは別に別館の皇族寮で起居され、宮内省属官が宮附として派遣されていた。

教育総監部は竹橋近く代官町にある。近衛師団司令部から近衛兵営の正門を過ぎるとすぐ近くである。その手前には私が近衛歩兵第二連隊附の際兼務していた近衛軍楽隊の跡がある。軍縮の際廃止された。近衛兵営の正門前の広場には、小松宮殿下の馬乗姿の銅像が印象的であった。この銅像は、いかにも皇居乾門に向かって進みつつあるように思われた。

教育総監部の庁舎は古い木造でいかにもお粗末なものであった。早速挨拶に行ったところ総務課附ということで、課長（中佐）の案内で教育総監の畑俊六大将に申告し各課を挨拶して廻った。畑大将は陸軍きっての俊英のように聞いていたが、初対面では猛将とはほど遠く体格

は小柄で温厚な親しみ易い将軍のように思われた。総務課の課員は皆親切であった。私のために料亭で歓迎会を催してくれたり何かと心配りをしてくれた。各課の課員は、大方陸軍大学校出の俊才で軍人の憧れの的である天保銭(陸大卒業のバッジ)を胸に光らせていた。それにも拘わらず誰も謙虚で奢るところはすこしもみられなかった。流石に軍教育の中核におられる方だけあって皆人柄がよいと思った。殊に私と最も関係の深かったある将校生徒の教育関係担任参謀は、忌憚なく意見の交換が出来、極めて積極的で信頼のおける人物であった。教育総監部における私の仕事の実務的なこととしては診療は殆んどなく定期的に行う健康診断と職員健康相談といった程度で、主たるものは、幼年学校、予科士官学校、士官学校、予備士官学校及び其の他各種学校の保健、衛生保育指導顧問的存在である。

ある日、部内の定期健康診断を行うこととなった。上は総監を始め本部長、騎兵、砲兵、工兵および輜重の各兵監の将官級から各課長、部員、部附の将校、下士官、属官、雇員、小使に至るまでかなりの人数である。

この場合には、総監でもわざわざ検査場までお出でいただいた。畑大将は、小柄ではあるが均整のとれた体格である。唯右胸背面に大きな病痕がある。これは 日露戦争のさい旅順要塞攻撃で負傷された創痕であると、大将自ら私に説明してくれた。陸軍の大部隊を上海に送るに伴って畑大将は、中支派遣軍司令官として中支に出征されることになった。その送別会が麹町の料亭で行われ、私も参列した。

9. 李王根殿下隨想

晩秋、予科士官学校の幹部の現地戦術が三島付近で行われた。伊豆長岡温泉で一泊して遭遇戦は愛鷹山麓で展開されることになっていた。統裁は学校長、現地指導は学校附の牧野大佐である。各部長、生徒隊長らと共に私も演習員の一員として決心を要図にまとめて提出した。演習員は、何れも陸軍における綽々たる戦術家である。素人の私なりの決心も大まかなところは原案に近かった。教育部長として演習に参加された李王根殿下の要図を見せて戴いた。陸軍大学校で鍛えられただけあって実に立派なものであったことを覚えている。

その年の暮、学校の幹部、学校長、幹事、学校附大佐及び各部長がそろって李王殿下の御殿に招待された。三宅坂の近くで今はプリンスホテルになっている。妃殿下はお見えにならなかったが、この日のご馳走は日本料理でそれも一流のものになると西洋料理や中国料理に劣らぬことを知った。李王殿下は蘭の栽培にご熱心なことは有名であるが、この日拝観する機会はなかった。

元旦の参賀は通例、正装のことになっているが、昭和十三年は支那事変激化のため一般軍装でよいことになった。先ず皇居において参賀の記帳を済ませてから、各宮家廻りである。各宮家においては、それぞれ慣例に従って年酒が準備されている。李王家は青年将校の間でもご馳走が沢山出ることで有名であった。顔馴染みのお附武官らが何かと接待してくれた。東久邇宮家では、大宮も妃殿下も避寒でお留守であったが、第二王子が予科士官学校の将校生徒であらせられた関係で、緋絨毯が敷き詰められた長い



昭和13年頃に着用した礼服

以後戦局逼迫して着用機会なし

廊下を通って、王子にお目にかかってから、別室で膳部も出て年酒を戴いた。この年以後、正装を着用する機会は、ついに来なかった。

早春のある日のことと思う。教育総監部にゆくと、四街道の砲兵学校に入学中の李鐬公殿下が、落馬で足に負傷されているから、教育総監の名代として見舞に行ってくれとのことであった。当時、李鐬公殿下は通学のため、千葉市の道場の紅谷家を仮寓としておられた。ここは私の妻の姉の嫁ぎさきで、一家をあげて別棟に移り、本宅を全部提供していた。

お附武官の案内で李鐬公殿下の静養されている離れに通された。殿下は、臥床されていた。

枕元に美しい妃殿下が、かしずかれていた。つれづれにお読みになられていると見えて、枕元に吉川英治の『太閤記』がおかれていた。殿下はご機嫌よく負傷のときの模様や、その後の経過など話された。経過は順調のようにお見受けした。(完)



李鐬公殿下千葉市の紅谷家にて(昭和13年)



勲二等瑞宝章を受章して
郷里の千葉県蓮沼村にて(昭和50年頃)